

令和元年6月28日現在

機関番号：31106

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03232

研究課題名(和文)近代移行期における「音」と「音楽」 グローバル化する地域文化の連続と変容

研究課題名(英文) A historical study of sound, music, and society from early modern to modern Japan: focusing on the effects of global influence on local culture of northern Tohoku.

研究代表者

北原 かな子 (KITAHARA, KANAKO)

青森中央学院大学・看護学部・教授

研究者番号：80405943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近代移行期の社会と文化について音楽の視点から考察することである。近世弘前藩民衆の儀礼と音の呪術性との関係、楽器の普及、国学など思想との関係に加えて、弘前藩と他藩との藩主同士の音楽を通じた交流や、弘前藩の平曲や仙台藩の能楽など、近世の音楽文化が近代以降の土壌を形成したことを論じた。

また、近代のグローバル化の中で、武士のキリスト教受容から洋楽が広がる様子を具体的に明らかにするとともに、和洋の音文化が拮抗する中で、邦楽保存に尽力する士族や、新たな音楽文化を作る士族の存在など、士族により伝統の喪失と創造が共時的に展開したことを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、音にかかわる感性が大きく変化した近代移行期の、武士階級から民衆までを、階層にとらわれずに対象とし、音や音楽文化との関わりを見ていくことで、近世、近代、民衆、士族などの視点からそれぞれ成果をだした。この研究全体に通底するのは、本研究が音楽文化を「知」の一つと捉え、消えゆく音にかかわる人間の活動や精神性に目を向けることで、「歴史資料に音を読み」、同時に「音に歴史性を与え」たことである。すなわち、史料発掘・分析に基づく日本史を基軸として音を論じたことが、方法論的意味でも学術的・社会的意義を持つと思われる。

研究成果の概要(英文)：This study explored change and continuity in the culture of music and sound, as it related to social transformations in Japan from the early modern to modern periods. This project examined the patterns of “sound” and “music” produced and adopted by commoners and the samurai ruling class, to consider modernization in northeastern Japan, and the effects of globalization on these patterns. We sought to shed light on: (1) musical traditions of local regions; (2) the education of “music” by samurai’s initiative; and (3) how local culture was influenced and reshaped by Globalization.

Ranging from the late 1700s to the 1910s, we elucidated the intellectual history of rites and music, and their practice at domain schools; local and foreign sounds perceived by a merchant scholar; the pride and identity of samurai who mediated music’s “Westernization” in Japan; and the disappearance and reconstruction of “traditional culture” in the face of the widespread “Western culture.”

研究分野：近代史

キーワード：音楽 異文化接触 近代移行期 武士と奏楽 民衆と音文化 キリスト教と音楽 グローバル化 民俗
芸能

1. 研究開始当初の背景

本研究グループは、平成23年度に採択された挑戦的萌芽研究において、武士階級や民衆など、近世の社会階層を限定せずに、移行期の社会における音楽の研究に着手し、在郷商人日記や弘前藩庁日記など庶民と武士階級の「音」や「楽」についての資料を掘り起こす中から、1)民族儀礼の中の「音」の意味や、2)弘前藩士による奏楽の実情、3)弘前藩武士たちの近代移行期における音に関わる思想的連続性に注目するようになった。さらにグローバル化の中であってキリスト教を受け入れた武士階級について、これまで研究蓄積が薄かった4)ハリストス正教の影響(北からのグローバル化)についても取り掛かる必要性を認識した。

以上のことから、本研究では民衆の音や武士の奏楽についてのこれまでの研究をより深めるとともに、対象地域を弘前から北奥羽に拡大した。この地域がアイヌ文化と接触する北東アジアとの接点に位置すること、18世紀半～19世紀の近世社会が変容する時期に「ロシアとの接触」という、ウェスタン・インパクトとは異質の文化接触、すなわちもう一つのグローバル化のなかにあったことに着目したからである。

2. 研究の目的

幕末から明治にかけて北奥羽地域の、民衆の「音」や武士階級の「楽」など、音楽に関わる諸相に注目し、移行期の社会と文化について、グローバル化の視点も加えて考察する。

士族層から民衆までの広い階層を対象とし、地域の多様な民衆芸能の「伝統(=音)」生成を社会体制変容の中に捉える。奏楽を担った士族層の邦楽素養(=楽)と近代以降への影響関係を明らかにする。箱館開港の影響下にあるこの地域の「北からのグローバル化」により、地域文化がどう変容し、新たな文化創出につながったかを分析する。

音に関わる感性の視点から、歴史の中の人間像の変化を分析・総合する複合的文化論を目指し、社会体制変化の背景にある文化の連続性について考察することが最終目的である。

3. 研究の方法

北奥羽3藩における音や音楽に関する近世・近代資料の徹底調査をその基本とした。さらに移行期の音・音楽文化の有り様についての討論を随時行った。近世から近代へと政治社会体制が移行する中で、何が伝統を作り出し、何が消えたか。また他からの影響(グローバル化)の中で何がどう変容し、何が変わらなかったのか。参加者による調査の進捗の中で討論を重視し、音・音楽を中心とした文化の連続性やその本質的強さを問う考察を深めた。

調査対象は、近世では公式文書や民衆の動向を表す地方文書、近代は、明治初期を含む対象各地域の新聞資料、学校史資料、プロテスタントや東方正教関連の宣教師文書、函館を含む開港地の英文資料とした。また本研究は「資料の中に音を読む」ことを基本姿勢とするが、芸能を記録した文字譜・数字譜など具体的な音を示す楽譜などの資料収集も行い、これについては可能な限り音で再現することで考察に資することを心がけた。

4. 研究成果

ここでは(1)近世弘前藩の民衆と音、(2)近世武士階級と雅楽、(3)開国によるグローバル化とローカルの3つの視点から、それぞれの概要と個別成果を記述する。

(1) 近世弘前藩の民衆と音

弘前藩を中心とし、仙台藩、盛岡藩の資料につき、音楽の視点から掘り起こしに努めるとともに、その解釈・解釈につとめた。これらの諸藩が存在した地域は現在でも民俗儀礼を色濃く残しつつ、近世から近代にかけて、「北」からの文化接触のなかに音と音楽を変容させており、とくに本研究課題を考えるのに当たって最良の分析対象となる。主な成果は以下の4点である。

天明・天保期における不作忌避の禁忌・豊穰祈念と音

甚大な飢饉に見舞われた時期に、弘前藩が出した「触」の解明から、当時の不作忌避と豊穰祈念に音が深く関わっていたこと、その背景として、音に呪術性をみる考え方があったことを明らかにした。また除災・予祝儀礼として行われる「虫送り」など音に関する行事が、娯楽性を伴いつつ祝祭化したことで、近代での継承につながったことを指摘した。

岩木山への登拝儀礼と音

津軽地方における信仰の中心だった岩木山への登拝儀礼と音について、藩庁日記などの公式文書に加え、津軽家文書、また金木屋日記など在外の資料の解釈から検討した。特に鳴物停止との関わりを検討することで、当時こうした儀礼に使われた太鼓、小太鼓、笛、すり鉦、さらに三味線などの各楽器の役割を明確にするとともに、特に太鼓については除災儀礼との比較検討により、各儀礼で果たした役割と重要性を明らかにした。

民衆と楽器—三味線と「津軽三味線」

地方の名を冠した唯一の三味線音楽である津軽三味線は、そのルーツを越後の瞽女に求める説

などが流布しているが、本研究においては藩政期の弘前藩庁日記や金木屋日記、平山日記などの民衆の文書を検討することで、近世弘前藩時代に三味線という楽器がどのように受け入れられていたかを初めて明確にした。特に当時の音楽の考察に欠かせない音の呪術性を踏まえ、他の楽器との比較において、近世から近代へと社会体制が変わった中で、それぞれの楽器と人々の関係がどのように関係し、変容したか、を明らかにするとともに、三味線については、三線が広く用いられた沖縄で、同様の楽器がどのように使われたか、という相対化の視点を入れて検討・考察した。

民衆と「西洋の音」

弘前藩の町民画家で国学者である平尾魯僊の体験と資料をもとに、幕末期の町民知識層が西洋の音をどのように捉え、表現したかを当時の社会情勢の検証も踏まえつつ考察した。また平田国学に浸水した魯僊が書き残した弘前藩領内の音に関する言い伝えを検証し、本来武士階級の音楽であった雅楽の知識が、民衆にもある程度理解されていたことを明らかにした。

(2) 近世武士階級と雅楽

弘前藩を中心とし、仙台藩、盛岡藩の奥羽諸藩、また相対化の視点として平戸藩、山口藩の資料につき、音楽の視点から掘り起こしに努めるとともに、その解読・解釈につとめた。これらの藩のうち、弘前藩が雅楽という藩政に関わる視点からの考察であるのに対して、大名子女や奥向きと言った側面から検討を加え、音楽が近世社会に持った多様な意味を解明している。主な成果は以下の4点である。

弘前藩の雅楽

これまで雅楽に着目した本格的な研究がほとんどなかった弘前藩について、藩士の雅楽・平曲習得状況、江戸の紅葉山楽人や上方の三方楽人の関わりについて本格的な資料掘り起こしおよび検証を開始した。弘前藩雅楽については、特に弘前藩学問所開校時の釈奠での奏楽をはじめとして、その導入経路や契機、藩主との関わりが明らかになりつつある。

近世大名家の子女教育と音曲

近世萩藩は、徂徠学の普及により男性の雅楽教育が行われた。そのため萩藩藩校は音楽を教習した数少ない学校だが、弘前藩でも藩学校で音楽を教習したとされる。そこで、弘前藩津軽家と音楽との関係解明を進める一方で、その相対化の視点として、近世後期萩藩の息女の音曲修養について、山口県文書館所蔵毛利文庫資料をもとに明らかにした。

大名家奥向の奏楽

平戸藩9代藩主松浦静山の側室蓮乗院の記録や、静山自身が収集した蔵書を「奏楽」の視点から分析し、10代藩主松浦熙も含めた時期の平戸藩奥向の奏楽について考察するとともに、藩主静山と弘前藩主や秋田藩主など他藩藩主との交流、ネットワークのありかたを明らかにした。特に弘前藩学校開校時の藩主であった津軽寧親と静山の交流は、泰親の奏楽に対する姿勢や弘前藩への影響を考える上でも興味深い視点となる。

(3) 開国によるグローバル化とローカル

弘前藩、八戸藩、盛岡藩など北奥羽の諸藩および仙台藩におけるグローバル化の影響を音楽の視点から取り組んだ。幕末から近代初期にかけてキリスト教を受け入れた土族の動向に関する英文史料や、東北からロシアに音楽留学した人物に関わる魯文史料を掘り起こすとともに、グローバル化、近代化の影響下にあった明治の土族が東京音楽学校を舞台として展開した邦楽保存運動の経緯についても考察した。主な成果は以下の4点である。

プロテスタント讃美歌と土族—西からのグローバル

明治初期に日本でも早い時期からプロテスタントキリスト教を受け入れた弘前藩土族の、讃美歌や歌に関わる活動に関して、宣教師や宣教師夫人が残した英文史料を中心として解明した。弘前に限らないが、英語を習得する目的で来日宣教師のところに集った武士たちは、最初に讃美歌と接した人々と思われる。本研究では、英文史料が存在する弘前のケースについて、弘前教会史料と新たに掘り起こした来日宣教師史料双方からどのように西洋音階に基づく歌が人々の中に膾炙していったのかを明らかにした。

東方正教の聖歌と土族—北からのグローバル

仙台藩の土族は、日本でハリストス正教が受け入れられていく中で中心的役割をはたした。本研究では、東方正教を受け入れた地域でどのように聖歌が広がったか、仙台藩土の一次史料を掘り起こすとともに、各教会史料などにより解明を始めた。特に明治20年代にペテルブルグに音楽留学をした金須嘉之進については、その留学の詳細を考察する糸口を掴んだ。また仙台藩は地方知行制をとったことから、武士階級の地域への文化的影響が大きかったが、東方正教を受け入れた一人である小野莊五郎の記録をもとに、仙台藩土族の音楽や音曲に関する意識もあきらかにするとともに、こうした仙台藩の文化環境が近代で西洋音楽を受け入れる土壌となっていた

可能性を指摘した。

弘前藩士族と雅楽

明治に入り、学校の唱歌教育体制が整う前にすでに讚美歌が広がり始めた弘前藩城下において、旧武士階級の人々がそれまで育んだ音楽文化にたいしてどのような意識で接し、演奏したかについて、あらたに掘り起こした藩政期の奏楽に関わる記録をもとに、明らかにした。特に明治初期に音楽が演奏された対照的な二つの場面（明治9年と明治14年の天皇巡幸記録）について比較考察することで、音楽が単に音を響かせる文化にとどまらず、結果的にきわめて対照的な文化への意識や政治信条や思想をあらわした可能性を指摘した。また押し寄せる洋楽文化に対抗した邦楽保存の運動についても考察した。

邦楽保存運動と弘前藩士族

弘前藩士族館山漸之進は、明治期に邦楽保存を積極的に政府に訴え、明治40年に官立東京音楽学校に邦楽調査掛を設置させ、さらに調査嘱託として平家音楽を担当し、その資料収集および保存に努めた人物である。本研究では館山の活動について、その事績を明らかにするとともに、当時の校長湯原元一との対立との視点から検討することで、この当時の東京音楽学校を舞台として展開した伝統の喪失と創造が共時的に進行したことについて明らかにした。特に家伝として平曲を伝えた楠美家の末裔である館山の平曲保存への取り組みが、時代の中でどのような意義とそして限界性を持ったか、音楽家としての館山の方向性と文献学的手法で平曲へのアプローチを行った山田孝雄との対立も含めて本研究において論じた。

< 上記成果の公開 >

書籍：以上の研究成果は最終報告としてミネルバ書房から2019年刊行の『近代移行期における地域形成と音楽—作られる伝統と異文化接触』に以下の10本の論文として所収した。

「祈り、そして娯楽—近世津軽の「騒」と音」(浪川)、「近世後期の大家奥向における奏楽の変容—松浦静山と松浦熙の比較から」(吉村)、「教養としての音曲・娯楽としての音曲—偕姫の養育をめぐる近世後期の萩藩の動向」(根本)、「北部沖縄における伝統音楽の変容—久志・辺野古の事例から—」(古家)、「三味線の近世—「津軽三味線」以前」(浪川)、「平尾魯遷の聴いた音と音楽—北奥地域のグローバル化と社会変容—」(FUJIWARA)、「東方正教の音楽と土族」(山下)、「目地初期弘前における洋楽受容と讚美歌」(北原)、「明治14年の天皇奥羽巡幸と弘前藩士族による雅楽」(北原)、「交差する邦楽調査と唱歌編纂—明治40年代の東京音楽学校」(鈴木)

科研主催シンポジウムなど：2018年7月21-22日の国際歴史シンポジウム：「グローバル化の中の東北と近代移行期の「音」文化」(北原かな子、浪川健治、古家信平、鈴木啓孝、山下須美礼、武内恵美子、デビット・ハウエル、河西英通、木村直也、谷本晃久)、2016年9月4日の「ひらめきときめきサイエンス(音楽で学ぶ青森の近代—幕末明治の音楽を体験しよう—)」(北原かな子、武内恵美子、山下寿美礼) およびによって、広く一般公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

浪川健治、「天気不正」と自然の回復—天明飢饉後の豊穰祈念と除災の発源—、弘前大学國史研究、査読有、2019、pp.40-58.

北原かな子、ジョン・イングによる弘前初の洗礼記録、弘前大学國史研究、査読有、145号、2018、pp.73-82.

FUJIWARA Gideon, Channeling the Undercurrents: Fusetsudome, Information Access, and National Political Awareness in Nineteenth-Century Japan, The Journal of Japanese Studies, 査読有, Vol.43-2, 2017, pp.319-354.

北原かな子・山下須美礼、資料紹介—旧仙台藩士小野莊五郎の音楽論：「音曲ノ不正八人民ノ品行ヲ乱ル」, 弘前大学國史研究、査読有、143号、2017、pp.33-45.

鈴木啓孝、伝統芸能者の「遺言」にみる国民文化—平曲家・館山漸之進の「情願書」を素材に、文芸研究、査読有、183号、2017、pp.49-62.

武内恵美子、弘前藩主の楽、日本伝統音楽研究、13巻、2016、pp.206-222.

浪川健治、不作忌避の禁忌と豊穰祈念、米沢史学、査読有、31巻、2015、pp.1-20.

〔学会発表〕(計 10 件)

古家信平、沖縄の火の神をめぐる諸問題、東北近世史研究会、2019年3月2日

浪川健治、自然と政治の imbalance-「天気不正」と「死罪除日」、東北史学会・弘前大学国史研究会合同大会(招待講演) 2018年10月6日

吉村雅美、江戸における大名家の交際と書物・知識受容—松浦静山と蓮乗院を中心に—、東北近世史研究会夏のセミナー、2018年8月25日、東北大学

国際歴史シンポジウム：「グローバル化の中の東北と近代移行期の「音」文化 (北原かな子、浪川健治、古家信平、鈴木啓孝、山下須美礼、武内恵美子、デビット・ハウエル、河西英通、木村直也、谷本晃久) 2018年7月21-22日

鈴木啓孝、明治40年代の『平家物語』研究 山田孝雄と館山漸之進を中心に、日本思想史学会、2017年10月28日

KITAHARA Kanako, SUZUKI Hiroataka, YAMASHITA Sumire, HOWELL David, SHAPIRO Michel, "Reconsidering Japanese Modernization from the Hokuo Region Christ and the Samurai: Dimensions of their Interaction" The Japanese Studies Association of Australia, University of Wollongong, AUS, June 29, 2017

山下寿美礼、北東北における東方正教の展開 近代移行期の土族と地域社会、東アジア 霊性・平和 研究会 2016年12月3日(於東北大)

鈴木啓孝、伝統芸能者の「遺言」から読み解く明治ナショナリズムの転回 平曲家・館山漸之進による2つの「情願書」を素材に、東アジア 霊性・平和 研究会 2016年12月3日(於東北大)

KITAHARA Kanako, TAKENOUCHI Emiko, FUJIWARA Gideon, SUZUKI Hiroataka, YAMASHITA Sumire, HOWELL David, 'Music as Intellectual History: A Study of Sound, Music, and Society from Early Modern to Modern Japan', Asian Studies on the Pacific Coast Conference, California State University Northridge, Northridge, CA, USA, June 11, 2016.

北原かな子、近代移行期における「音」と「音楽」—グローバル化する地域文化の連続と変容—、筑波大学シンポジウム：グローバルな「知」と地域の「知」—「知」の受容と創造、2015年10月17-18日

〔図書〕(計 2 件)

北原かな子・浪川健治編『近代移行期における地域形成と音楽—作られる伝統と異文化接触』ミネルヴァ書房、2019、300.

浪川健治・古家信平編『江戸—明治 連続する歴史(別冊環23)』藤原書店、2017、336.

〔その他〕

ホームページ等

近代移行期における「音」と「音楽」 グローバル化する地域文化の連続と変容
<http://kitahara.co/kaken/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：浪川 健治

ローマ字氏名：(NAMIKAWA, kenji)

所属研究機関名：筑波大学

部局名：人文科学研究科(系)

職名：名誉教授

研究者番号(8桁)：50312781

研究分担者氏名：古家 信平
ローマ字氏名：(FURUIE, sinpei)
所属研究機関名：筑波大学
部局名：人文科学研究科(系)
職名：名誉教授
研究者番号(8桁)：40173520

研究分担者氏名：武内 恵美子
ローマ字氏名：(TAKENOUCHI, emiko)
所属研究機関名：京都市立芸術大学
部局名：日本伝統音楽研究センター
職名：准教授
研究者番号(8桁)：30400518

研究分担者氏名：山下 須美礼
ローマ字氏名：(YAMASHITA, sumire)
所属研究機関名：帝京大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号(8桁)：90523267

研究分担者氏名：鈴木 啓孝
ローマ字氏名：(SUZUKI, hirotaka)
所属研究機関名：熊本大学
部局名：大学院人文科学研究部(文)
職名：准教授
研究者番号(8桁)：20803711

研究分担者氏名：吉村 雅美
ローマ字氏名：(YOSHIMURA, masami)
所属研究機関名：日本女子大学
部局名：文学部
職名：講師
研究者番号(8桁)：70726835

(2)研究協力者

研究協力者氏名：藤原 義天恩
ローマ字氏名：Fujiwara Gideon

研究協力者氏名：根本 みなみ
ローマ字氏名：Nemoto Minami

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。